

令和5年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		年間評価 (参考：中間評価)		学校関係者評価 (2月14日実施)	総合評価 (3月13日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	自立と社会参加を目指し、児童生徒の発達段階に応じた系統性のある教育課程を編成する。	①学部間の教育課程の系統性を検証・整理し、社会参加を見据え、発達段階に応じた教育内容の充実を図る。(継続) ②ICT機器の活用の推進と学習教材、授業例の充実を図る。(継続) ICT機器の活用事例について発信を進める。	①発達段階に応じた教育内容の系統性について学部・部門でまとめる。そのうえで学部・部門を超えて組織的に整理を進め、全校で系統性のある教育内容を考え実践する。(教務G/教務U) ②研修等を行うことで、ICT機器活用に対する教職員の理解を深めるとともに、ICTを活用した教材や授業例を共有し、授業改善につなげる。ICT機器の活用事例をホームページや学年通信等で保護者や地域に伝えるようにする。(総務G/情報管理T)	①学部間のつながりを示しつつ、学部・部門を超えて組織的に整理を進め、系統性のある教育内容の実践につなげることができたか。 ②ICT機器を効果的に使用した授業を各学部で実施することができたか。ICTを活用した事例を全職員で共有するとともに、保護者や地域に発信できたか。	①各学部等の「身につけたい力」や教育内容等について発達段階に応じた系統性や学部間のつながり等、校内研究において各部門長、学部長等で系統的に整理を進め、発達段階に応じた「身につけたい力の内容表」を作成した。校内で周知し、各学部で内容表をもとに校内研究や教育実践を進めた。 ②研修を行い、理解を深めるとともに活用スキルの向上を図った。 月4回ICT利活用に関する座談会を実施し教材や活用事例を共有し活用法について意見交換を行った。 ICT機器の利活用を学校HPや学年通信等で紹介したが、利活用の主体が教員であることが多かった。	①各部門長、学部長等で「身につけたい力の内容表」を作成し、校内研究等で実践を進めたが、期間が短く、全体での十分な共通理解までは至らなかった。今後、活用とともに共通理解を更に進めていく必要がある。 ②来年度から一人1台端末が始まることも踏まえ今以上の拡充を図るために、全員必須の研修会を行う。また、一人1台端末が始まることで、児童生徒が主体的に操作する活用事例の発信に力を入れたい。	①学部間のつながりが十分に共有されていないことから、今後は年度初めに職員全体に周知を図り、学部間のつながりを意識的に深め指導に活かすようにするとよい。保護者の「そう思う」が高い。自信を持ってほしい。 ②教員がICT機器に慣れる必要がある。横浜市でも授業への活用を進めている。使うことが目的にならないよう留意しながら、授業への活用を進めていくとよい。	①発達段階に応じた「身につけたい力の内容表」を作成し、校内で周知するとともに校内研究等で実践を進めた。周知や実践の期間等が十分でなかったため、活用に向けた職員の共通理解までは至らなかった。 ②教員を対象に研修や座談会を行い、ICT機器活用への理解を深めるとともにスキルの向上を図った。 HPや学年通信や授業参観を活用し、より一層の情報発信に努める。	①作成した「身につけたい力の内容表」を年度始めに職員全体に周知し、児童生徒の学習等の目標設定を考える上での参考資料とするとともに、教員間での共通理解を図るツールとしての活用を進めていく。 ②全員必修のICT活用研修会を行う。一人1台端末が始まることで、児童生徒自身が操作する活用事例を増していく。 HPや学年通信や授業参観を活用し、より一層の情報発信に努める。
2	児童生徒 指導・ 支援	障害や発達に関わるニーズに応じた適切な教育支援を行う。	①医療的ケア児の実態に応じた通学支援の方法を確立する。(継続) ②校内環境整備や防災整備を進め、誰にとっても分かりやすく活動しやすいようにする。(継続)	①保護者のニーズや児童・生徒の健康状態を把握し、関係者の見解をもとに適切な通学支援について検討する。乗車中の配慮事項、必要なケアを整理しマニュアル等を作成する。登校便に関して医療的ケア児のための環境整備を進める。(指導健康G/医療的ケアT・通学支援T) ②校内環境を見直し、安全な環境を整備する。避難経路を見直し、児童・生徒が視覚的にわかりやすい表示を整備する。(総務G/環境安全T)	①学校の現状を踏まえた通学支援のあり方を示し、関係機関との連携を強化することができたか。手続きの円滑化を図ることができたか。 ②安全な校内環境を整備することができたか。避難経路がわかりやすく、避難しやすくなったか。	①現在、1名がSBを3名が福祉車両等を利用し登校している。次年度も利用増が見込まれる。10月に教員向けに通学支援研修会を実施し、制度への理解を深めた。次年度は構築したシステムを利用してニーズ調査を行う。新しいケースには乗車マニュアルを使用して対応中である。 ②避難訓練の反省アンケート等を基に、避難の際に安全に且つ迅速に避難できる経路を検討・作成し、全体に周知することができた。防災物品の保管場所を整理し、置き場所がわかるように掲示を行った。	①構築したシステムや乗車マニュアルの活用と改善を行っていく。 ②安全に避難できるような避難経路については、新年度、教室配置が変わるので再検討していく。防災物品の保管場所のスペースを確保し、必要な物品を配備していく。	①この1年で利用者を増やし、マニュアル整備や、教員への周知を進めることができた。次年度も継続していけるとよい。 ②保護者も巻き込んだ訓練や地域と協働の訓練も行うとよい。屋内で家具の転倒が危惧されている。学校でもそうした点検をしっかりとってほしい。	①新しく構築したシステムを導入し、よりスムーズに利用手続きが進むようにしていく。 ニーズが的確に把握できるよう面談の機会以外でも相談しやすい環境を整えていく。 ②反省アンケートをもとに避難経路の検討や防災訓練の再検討を行った。防災物品の保管場所を整理し、物品の保管量を増やした。	①新規利用者に新たな乗車マニュアルを示しスムーズに利用手続きが進むよう改善を図る。医療的ケア懇談会を2回開催し、4月の懇談会でこの制度について周知を図り、相談しやすい環境整備に努める。 ②保護者も巻き込んだ訓練や地域と協働の訓練も計画していく。 災害の発生後を想定したより充実した訓練を計画する。
3	進路指導 ・支援	児童生徒一人ひとりの生きる力を育むためのキャリア	①卒業後の社会生活を見据えた進路学習の系統性を整理する。(継続) ②全職員が進路指導・支援の現状や	①卒後の生活を具体的に理解できるように職員研修を行う。各学部における進路学習について整理していく。(連携支援G/進路支援T) 進路担当と連携し、進路に関係した研修や情報共有を行う。各学部段階での「身につけたい力」について検討、整理し、共有化を図る。(教務G/教務U) ②進路決定に向け、年齢や発達段階に合わせた指導や支援につ	①進路支援に対する全職員の理解が深まり、全職員による協働が進んだか。 ②進路指導・支援に対する全職員の	①夏季公開講座「進路を考える会」を開催し、障害福祉制度や地域資源に対する理解を深めることができた。全職員対象の「進路情報交換会」や学部ごとに進路研修をとおして進路傾向や卒後の生活について理解を深めた。「身につけたい力の内容表」の進路に関する内容を整理し、「金沢支援学校の進路学習(素案)」を作成した。 ②夏季休業中に担任によるアフターフォローを実施した。報告書を活用	①制度や地域資源の変化を捉え進路支援をしていく必要がある。学部ごとの研修を継続実施する。職員に向けた情報提供の機会を増やす。今後、「金沢支援学校の進路学習(素案)」について進路担当等と連携し、見直しとともに活用方法について検討していく。 ②職場開拓については、近隣企業とのつながりをいかし職	①教員の「わからない」が目立つ。進路に対する意識を高めるために卒業後の生活を見てイメージがもたせるとよい。 会社で働く方もいるが、難しい方も多く家族が大変だと思う。社会全体で障害者を支える仕組みを作るべきだと考える。 ②保護者対象の進路説明会は同じ話が多い。小・中・	①「進路を考える会」「進路情報交換会」等で制度や地域資源、進路傾向に関する研修の場を設定した。卒後の生活について理解を深めるために、研修の持ち方や情報発信方法について検討する。「金沢支援学校の進路学習(素案)」を作成したが、十分な活用には至らなかった。 ②学部ごとに進路研修会を実施し、発達段階や学年に	①制度や地域資源の理解を促すため職員向けの研修を継続する。「進路だより」等を活用し情報発信の拡充を図る。職員対象の福祉事業所等を見学する機会も検討していく。「金沢支援学校の進路学習(素案)」の活用について検討を進める。 ②学部ごとの進路研修の機会を引き続き設定する

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		年間評価(参考:中間評価)		学校関係者評価 (2月14日実施)	総合評価(3月13日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	成果と課題	改善方策等	
		教育を推進する。	課題を理解し、進路担当と協働する場面を増やす。	いて考えられるよう学部ごとに研修を行う。担任や相談担当等と連携しアフターフォローや職場開拓に取り組む。 (連携支援G/進路支援T・地域支援T)	理解が深まり、全職員による協働が進んだか。	し担任と進路担当・相談担当等で密に情報共有を行いながら、継続的な支援を行うことができた。2月に学部ごとの研修を計画している。発達段階や学齢に合わせた進路指導や支援について情報共有を行う。	場体験や現場実習の機会を増やしていくことが課題である。担任や実習担当と協働し近隣企業との関係を深めていく。	高それぞれの年代に応じた内容を話すよ。また、一方的な説明だけでなく相互に話せる場(座談会など)も設定するとよい。	合わせた進路指導・支援について理解を深めることができた。報告書を活用し、担任や進路担当、相談担当で協働し継続的なアフターフォローができています。協働の場はアフターフォローや実習対応に限られている現状がある。さらに協働する場面を設けたい。	ことで、進路指導・指導の現状や課題についての理解を促していく。職場開拓や啓発の取り組みの場面で、実習担当や相談担当等と協働して業務にあたっていく。
4	地域等との協働	インクルーシブな社会の形成に向けたセンター的機能による発信と協働の充実を図る。	①地域との協働事業等を充実させ、児童・生徒が地域と相互理解を深めることのできる教育活動の充実を図る。(継続) ②障害のある児童・生徒が地域で実態に応じた教育を受けられるよう、地域の学校の特別支援教育に係る専門性の向上を図る。(継続)	①ボランティア受け入れ体制を整え、積極的に活用していく。また、地域資源を活用し共同で作品展や販売会を実施できるよう準備を進めていく。 (連携支援G/連携渉外T・広報渉外T) ②校内での授業づくりの工夫や支援方法をホームページや地域の会議等で紹介し、それらの情報を得た地域の学校が専門性向上に役立てるよう働きかける。地域の学校のニーズをふまえた内容設定で、巡回相談、研修会等を実施する。(連携支援G/地域支援T)	①ボランティア等の受け入れ制度が整備され、実働できたか。各団体との新しい連携が進んだか。 ②ホームページやチラシ配付などの情報発信を通じて、地域の学校で教育的ニーズを踏まえた教育実践を実現することができたか。	①継続的にボランティア受け入れを行い、校内の全学部で受け入れが可能になった。新項目での活用も始めた。地域資源を活用した作品展では昨年度と比べて参加する行事が2件増えた。既存の作品展でも期間が2か月に伸びた。また、富岡総合公園や企業と連携した教育活動も進んでいる。 ②HP「支援の知恵袋」を充実させ、積極的に情報を発信した。地域でも活用されている。また、相談主訴や組織の現状、目指す方向性等のインテイクを丁寧に行い、地域のニーズに応じた巡回相談や研修会を実施できた。実施後のアンケートでは概ね良い評価をいただいた。個の支援にとどまらず学校全体の意識や専門性向上につながったと考える。 (小→13回、中→2回、高→5回、自立支援協議会、放課後きっず等)	①行事ボランティアについては、校内のニーズを把握し整備していく。作品展参加の機会が増えたことを踏まえ、予算や物品の確保、作品等を収集する校内体制整備を進める。地域の販売会については土日の開催が多いため生徒の参加が難しいことが課題である。 ②UD化等、環境への配慮に対する地域の学校の意識が高まったが、障害特性への支援については組織的な対応につながりにくかった。今後も学校コンサルの視点をもった働きかけが必要である。多くの教員が地域を知りセンター的機能の発揮を意識できるよう、CO以外の教員も巡回相談や出前授業等にかかわる機会を設けたい。	①ボランティアの活用が進んでいる。地域との協働事業等の取組も拡充されていることがわかる。継続した取り組みを進めていただきたい。 ②今後もセンター的機能や交流学习などをとおして地域の学校と連携を深め、障害について知ってもらおうとよい。社会で活躍している障害者はたくさんいる。できる姿を地域の人に見てもらい障害者に対する理解を促すとよい。	①ボランティアの受け入れを全校に拡大し、全学部で受け入れ可能になった。ボランティアの項目についても校内のニーズを把握して増やした。今後もニーズを把握して必要に応じて活用していく。 ②HP「支援の知恵袋」等での情報発信や地域のニーズに応じた巡回相談・研修会等の実施に対して、地域から良い評価を受けることができた。今後も継続して取り組んでいく必要があるが、一方で、地域にかかわる教員が限定的になっていることが課題である。	①ボランティアについて校内のニーズを把握し、計画的、組織的に活用していく。 ②学校内での取組が地域へつながっていることを実感できるように校内に向けた情報発信を行ったり、様々な教員が地域にかかわる機会を設けたりすることで、校内全体の地域に対する意識を高めていく。
5	学校管理 学校運営	信頼される学校づくりの推進のため、安全で安心できる指導体制及び管理体制を進める。	①情報発信の在り方を検討し、児童・生徒の学習活動や学校の取り組みの発信を進める。(継続) ②働き方改革に向けた業務改善の推進に取り組む。(継続) ※事故不祥事関係は不祥事ゼロプログラムにて充実させることを周知する。	①ホームページの更新や学校だよりの作成等について、作業の流れや役割を整理し、校内の各組織と連携して正しい情報をわかりやすく迅速に発信していく。(連携支援G/広報渉外T) ②それぞれのグループ・チームで再編した組織について平準化、効率化、スリム化の視点から検証し課題点を洗い出し、改善案を作成する。 ※毎月事故不祥事防止会議を開催し、不祥事ゼロに向け様々なテーマで自己点検を実施する。(各グループ・各チーム、各学部・学年、管理職)	①ホームページや配付物による学校から保護者等や地域の方に向けた正しくわかりやすく迅速な情報発信について、保護者等からの評価が向上したか。 ②業務の平準化、効率化、スリム化によるグループ組織の再編案について、それぞれのチームで検証し、改善点を洗い出して次年度につなげることができたか。	①「かなよう日記」や「学校だより」で学校の様子や行事などの情報を校内の各組織と連携して発信することができた。かなよう日記の更新の仕方を変更して滞りなく更新できるようにした。 ②各グループ・チームで業務を遂行しながら業務内容を見直し効率化を図った。また、業務の平準化に向け組織を再編し承認を得た。 働き方改革については、月平均時間外勤務が昨年度は月平均16.77時間に対し今年度は15.75時間と1時間以上短縮した。 ※毎月事故不祥事防止会議を開催し、自己点検を実施しており、現段階で不祥事ゼロを達成できている。	①学部によって情報発信に偏りが出ないようなシステム作りを検討していく必要がある。 ②次年度、新体制で分掌業務を行いながら、効率よく業務を遂行できるか、業務量は適切かを検証していく。 ※事故不祥事防止会議及び自己点検を継続実施する。アクシデントがあれば全校で共有し再発防止に努める。	①療育センターでは不審者対応訓練等をメールで広報しているが、アンケート結果は「知らなかった」がほとんどだった。マメールや保護者会だよりでもPRした。学校も複数の手段を使って情報発信するとよい。 ②保護者のニーズは高まる一方。求めるだけでなく教員も楽に仕事ができる方法を考える必要がある。	①「かなよう日記」や「学校だより」で校内の様子を定期的に発信した。また、「学校だより」の更新についてマメールで保護者へ発信した。校内の一部の教員しかHPの編集方法を知らないことが課題である。 ②教職員の時間外勤務時間が月平均1時間短縮し、僅かではあるが働き方改革が進んだ。業務の平準化にむけ、グループ業務分担のさらなる見直しを行った。	①HPの編集方法についての校内研修会を実施する。また、マメールの効果的な活用を検討していく。 ②引き続き業務分担の平準化を図り、時間外勤務の短縮につなげていく。